

タイの高等教育機関における C 大学の SEND プログラムの役割とは ——K 大学での日本語指導・指導支援・交流活動の実践から——

鹿目葉子、横田恭一、石崎大地
篠原映美、成田ゆに、西田菜摘

1. はじめに

2012年、文部科学省は「大学の世界展開力強化事業～ASEAN 諸国等との大学間交流形成支援～」として、世界に雄飛する日本として誇れる人材の育成を目指した政策を打ち出した。その一つが SEND プログラム⁽¹⁾である。SEND とは Student Exchange - Nippon Discovery の略であり、目的は2つに分けられる。一つは「日本人学生自身の異文化理解を促すこと」であり、もう一つは「将来、日本と ASEAN との架け橋となるエキスパート人材の育成を目指すこと」である。これらの目的を達成するために、日本人学生は留学先の現地の言語や文化を学習するとともに、現地の学校等での日本語指導支援や日本文化の紹介活動を実施することが求められている。

日本の高等教育機関に所属する日本人学生の主な派遣先として、タイでは中等教育機関があげられるが、C 大学は、タイの協定校である K 大学に、2013年は1名、2014年は4名の学生を派遣した。派遣期間は3週間であり、期間中、日本人学生は初級から中・上級レベルまでの日本語学習者に日本語の指導及び指導支援と交流活動をおこなった。SEND プログラムは5年間継続されることから、2年目の終了にともない、本プログラムの海外での日本語教育における役割を考察するため、K 大学の日本語学習者及び SEND プログラム担当教師にアンケート調査を実施した。

本稿では、2014年度実施プログラムを対象としたアンケートの結果を基に、C 大学の立場から、K 大学における本プログラムの役割を考察するとともに、今後の課題についても述べる。

2. C 大学における SEND プログラムについて

2012年、C 大学は文部科学省の「グローバル人材育成推進事業（タイプA：全学推進型）⁽²⁾」に採択され、新たな取り組みとして、全学部生を対象に2012年度後期から、「C 大学文学部 SEND プログラム」を開講した。C 大学による本プログラムの目的は、日本人学生自身の異文化理解を促し、将来、日本と ASEAN との架け橋となるエキスパート人材を育成することにある。この目的を達成するため、本プログラムは「海外における日本語教育や異文化交流の経験を通して、異文化理解並びに自国の客観的理解を深めること」を学生に求めており、日本語教育に重点を置いたものとなっている。

本プログラムは4つの段階で構成されており、約1年間のコースである。日本人大学生による日本語の指導活動及び異文化の交流活動は、最終の段階4において実施される。2014年度は、タイ

の K 大学において 3 週間にわたり実施され、1 週目に授業見学、2 週目から 3 週目にかけて TA 及び授業実習が行なわれた。また、それらと並行して、K 大学の日本語学習者との異文化交流や、一般市民向けの日本文化関連のイベント活動も行われた。タイ人日本語学習者には、日本人学生との接触を通して、日本語学習への意欲をさらに高めることや日本事情に関する新たな知識を得ることが期待された。

段階 4 の実施に向けて、段階 1 では、広く日本語教育の基盤となる科目を C 大学にて履修することが日本人大学生に求められている。基盤科目は表 1 のとおりである。日本人学生は後期の授業期間に 3 科目 6 単位分の科目を履修することが原則となっており、その間、課題図書⁽³⁾ 2 冊を読むことも課される。

表 1 段階 1 及び段階 3 の基盤科目

国語系	国語学概論, 国語史
言語系	言語学, 社会言語学
異文化教育系	国際理解教育論, 多文化教育学, 日本語教育, 日本語教育方法論* (*日本語教育方法論は段階 1 では履修不可、段階 3 においてのみ履修可)
英語系	音声・音韻論, 形態・統語論, 意味・語用論, 心理言語学, 社会言語学

次に段階 2 では、ロンドンにある英国国際教育研究所（以下：IIEL）で、段階 4 に進むための条件である Postgraduate Certificate in Teaching Japanese as a Foreign Language の取得を目指し、四週間、日本語教育に関する専門科目を履修する。そこでは、言語分析研究、地域研究、外国語教授法などを受講後、初級者向け教科書『JAPANESE FOR BUSY PEOPLE I』から指導項目を与えられ、8 名前後の初級クラスでの教育実習を 3 回行う。

さらに段階 3 では、C 大学にて①講義受講（表 1 参照）、②模擬授業、③授業見学、④派遣先の言語と文化についての学習を行う。①は、前期の授業期間に、段階 1 と同様に 3 科目 6 単位分の科目を履修することが原則となっており、段階 1 で履修をしていない科目から選択する。また、日本史や日本文化についての学習、外国語教授法の復習や日本語教科書分析など、段階 2 で身につけた知識の定着も試みる。②は、日本人学生一人一人が、他の日本人学生やプログラムの指導教官、合わせて十数名を「外国人学習者」に見立てて授業を行い、授業後、学習者役の学生・教官から助言や指導を受ける。③は、C 大学や学外の日本語教育機関の授業を見学し、その活動の成果を「見学ノート」としてまとめる。④は、段階 4 の派遣先からの留学生に言語・文化紹介をしてもらい、その地域についての知識を深める。

なお、段階 4 終了後、学習の蓄積の可視化を目的として、SEND プログラムでの活動をまとめたポートフォリオを各自作成し、SEND プログラムの学生代表者が海外実習報告会で報告を行う。

3. K 大学での実践

3.1 日本人学生の背景

C 大学文学部 3 年生の 4 名であり、彼らの専攻は社会学、日本史、教育学、国文学である。また、彼らは SEND プログラムに参加するまで日本語を教えた経験はなく、卒業後の進路として、日本語教師を明確に目指している者もない。

3.2 日本人学生の担当授業について

K 大学では、SEND プログラムのスーパーバイザーを専任の日本語母語話者教師（以下：NT）が担当する。NT は日本人学生の授業見学と実習科目について、他の NT とタイ人日本語教師（以下：NNT）と話し合いのうえ決定し、日本人学生に渡航前にその内容を伝える。本プログラムでは、ビジネス日本語学科の「会話 3」、日本語学科の「総合日本語」を実習科目とし、それ以外の「エッセイ・ライティング」、「観光日本語」等を TA 及び授業見学科目とした。

3.3 授業実践及び交流活動

授業を行うにあたり、日本人学生 4 名を 2 つのグループに分けた。2 名はビジネス日本語学科で実習を行い、もう 2 名は日本語学科で実習した。また、交流に関してはグループごとに分けていない。さらに、各人が実践する授業は本プログラムの期間の制約から 2 回ずつとした。

3.3.1 ビジネス日本語会話 3（初級）

ビジネス日本語学科 2 年生の初級会話 1 時間半の授業のうち、日本人学生 2 名は 30 分ずつ担当した。使用した教科書は『JAPANESE FOR BUSY PEOPLE II』であり、実習ではそれぞれが、①前回の NNT による授業で学習した文型の復習と②その文型を用いた会話練習を行った。具体的には、①その文型を使った会話の場면을示し、日本語学習者と既習文型の使い方を確認した後、②日常生活とビジネス、それぞれの場面で、その文型を使った会話のペア練習を行った。本実習では、特に②に時間の大半を費やした。

本実習では、日本人学生が①と②を実施するにあたり、日本人学生自身が担当箇所の教案を作成した。教案を作成する際、対象者が初級学習者であることから、日本人学生の発話に含まれる語彙の選択、日本人学生の発話量と日本語学習者の発話量のバランスに留意した。また、実習の際には、会話練習を支えるためのワークシートを使用し、重要項目は、文字情報と画像情報の融合が容易である（宮内 2009）パワーポイントに提示した。

3.3.2 総合日本語（中上級）

日本語学科 3 年生の総合日本語の週 2 回、各 90 分の授業のうち、それぞれの授業の前半は NT が文法を担当し、後半の授業は日本人学生が速読とディベートを担当した。本授業における主教材は『ニューアプローチ中上級日本語（完成編）』であり、NT は主教材からトピックを選択し、その読解に必要とされる文法の授業を行った。一方、日本人学生は NT が選択した主教材のトピックに関連した内容で速読とディベートの授業を組み立てた。速読の授業を組み立てるにあたり、

小川（1991）の「内容把握がいかに早く正確にできるようになっても、読み終えた先に何らかの感慨がなければその作業は虚しいのではないか」という意見を踏まえ、学習者にとって何かしら心に残るテーマを見つけることを試みた。

また、内容の理解度を測るために副教材シートも作成した。副教材シートを作成するにあたり、段階 2 の IIEL での研修において、副教材は視覚にうったえる方が理解度が高まる、と学習したことから、絵やキャラクターを配置し、視覚的に楽しめるようにした。さらに、学習者が興味を持ちやすい日本の事柄を盛り込んだ文章を選択することにも留意した。ディベートのテーマは速読の授業後に学習者が興味をもった内容を選択した。学習者は 2 つのグループに分かれ、提示されたテーマについての各自の意見を述べる一方、そのテーマに関して日本人学生ならどのような意見を持つのかを質問し、日本人とタイ人の間の考え方の異なる点や共通点を見つけていった。

3.3.3 交流活動

交流活動を実施するにあたり、実際の日本語教育の現場に参加する実習生として一定の節度を持つことに留意した。具体的には、①「ら抜き言葉」のような教科書では誤りとされる言葉を使用しないなど、発話の乱れに細心の注意を払うこと、②学習者が理解しやすい語彙を選ぶこと、③語彙訂正よりも学習者の発話意欲を尊重すること、である。本交流活動は、「大学内での交流」と「大学外での交流」の二つに分けられる。前者は、基本的に授業がある平日に学生食堂において学習者と食事をしながら行われた。そこでは、学習者が日本語を話すことを目的としたコミュニケーションだけではなく、日本人学生が異国で生活をするための助言を学習者から得る機会となった。また、後者の交流は JapanFesta⁽⁴⁾ など日本文化に関連するイベントへの参加や観光地巡りなど、主に休日に行われた。バンコク市内観光の際には公共交通機関の利用方法や大型ショッピングセンターの案内、文化遺産を訪問した際はタイの歴史の説明など、学習者が主体となって新旧タイ文化を紹介した。

3.4 K 大学の日本語教師の取り組み

日本人学生を受け入れるにあたり、C 大学から実習終了後に評価報告書の提出が求められている。そこで、担当教師は、評価報告書の項目を参考に、学生の実習科目を選択し、実習プログラムを作成した。評価報告書の内容は、日本語指導の知識及び技術、教材研究、異文化理解、文化的貢献、日本語教育への関心と意欲、担当のクラス運営、に分けられている。本プログラムは 3 週間と短期間であるため、上記のうち、日本語指導の知識及び技術の獲得、並びに異文化理解の促進が図れると判断した科目を実習科目として選択し、日本語学習者への日本語指導も課した。また、授業以外で日本人学生が各学年の日本語学習者と交流できる場も提供した。さらに、本プログラムにおける実習の実施にあたり、日本人学生に下記の 4 つの手順を設けた。

- ①担当する授業の事前見学：クラスの雰囲気をつかむこと、授業の進め方を見るのが目的である。見学後、日本人学生と教師とで質疑応答の時間を設けた。

- ② 教案及び副教材の作成：日本人学生自身で作成させ、担当教員がチェックを行う。
- ③ 授業の一部を担当：授業中、担当教員は日本人学生の授業の進め方等をチェックする。
また、授業が滞りなく進んでいくよう、最小限のフォローをする。
- ④ フィードバック：内省をさせるとともに、次の実習に向けてのアドバイスをする。

4. 調査概要

4.1 調査の目的

本調査では、下記の2点を明らかにし、その分析結果から本プログラムの海外での日本語教育における役割を考察することを目的とする。

- ① 日本人学生による授業や交流活動が、K大学の日本語学習者にもたらした利点とは何か
- ② K大学の教師及び日本語学習者は日本人学生に何を求めているのか

4.2 調査の方法

4.1に挙げた目的を探るため、日本人学生が授業実習、TA及び授業見学を行ったクラスの学習者と本プログラムの実行責任者であるNT及びNNTにアンケート調査(表2)を実施した。その分析結果から本プログラムの役割について考える。

表2 アンケート調査の項目

	教師用	日本語学習者用
①	日本人学生が授業や交流活動に参加したことで、日本語学習者にとって良かった点は何ですか。	日本人学生と交流をして、どう思いましたか。何か変化がありましたか。
②	日本人学生と学習者が交流する前と後では学習者にどのような変化が見られましたか。	日本人学生による日本語の実習授業について、あなたの意見を自由に書いてください。
③	日本人学生がTAや授業の一部分、交流活動をするために必要なことは何ですか。	日本人学生に、どの科目を教えてもらいたいですか。その理由も書いてください。
④	教師としての日本人学生に不足している部分はどのような点ですか。	日本人学生の授業と教師の授業で、一番の相違点は何ですか。
⑤	日本人学生をどのように位置づけていましたか。望ましい位置づけとは何ですか。	来年も日本人学生に来てもらいたいですか。来る場合、授業をしてもらいたいですか。

4.3 調査の対象者

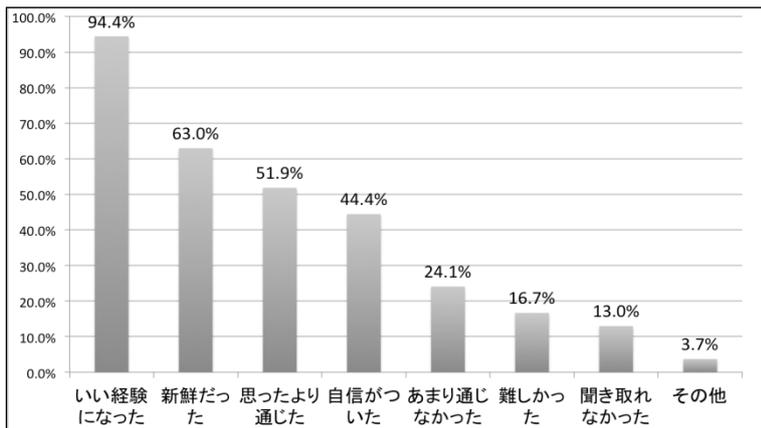
本稿の調査は、K大学のビジネス日本語学科と日本語学科の日本語学習者、NTとNNTを対象とした。ビジネス日本語学科は2年生と3年生の53名、日本語学科は2年生から5年生までの55名、及び2014年度、本プログラムの実行責任者であるNT1名とNNT1名である。日本語学習者108名のうち、訪日経験がない者は45.5%であり、本プログラム開始前にNT以外の日本人との接触回数が0回及び接触しても挨拶程度の者は23.1%であった。

5. 結果と考察

5.1 日本語学習者へのアンケート調査から

まず、今回の日本人学生による一連の活動が、日本語学習者にどのような利点をもたらしたの

かを考察する。図 1 のグラフは、日本語学習者が日本人学生と話した（交流をもった）感想を集計したものである。割合の高いものから、「いい経験になった」が 94.4%、「新鮮だった」が 63.0%、「思ったより通じた」が 51.9%であった。また、日本人学生と話したことで「もっと日本語を勉強したいと思った」と回答した日本語学習者が 98.1%、「日本へ行きたいと思った」が 94.4%、「自分の日本語は上手になった」が 68.5%であった。タナサーンセニー（2006）によれば、日本人と接触したことが学習者の自信に繋がったり、日本語の上達や異文化理解の促進などに影響がみ



られた、という報告は数多くあるという。つまり、本交流活動も同様の結果が得られ、日本人学生との交流が日本語学習者にとって「新鮮」で「いい経験」であり、「自信がついた」、「もっと勉強したい」、「日本へ行きたい」といった日本語習得や日本理解に対するモチベーションの

図 1 日本人学生と話した感想

高まりをもたらしたと考えられる。さらに、同世代の日本語に触れるという今回の経験は、「学習者と教師」という閉鎖的な関係での日常化した日本語学習環境から一歩進んで、日本語学習者が教室での勉強によって身につけてきた日本語を「試す場」になったと考えられる。前述のように、K 大学の日本語学習者は、日頃勉強している日本語を NT 以外の日本人との会話に生かす機会が少ない。また、後述するが、日本人学生に求めることを「日本語学習者が日常では行うことが難しい『同世代の日本人との交流』を实践すること」と教師が回答しているように、同世代との交流もほとんど無いのが現状のようである。その中で、SEND プログラムにおいて、K 大学の日本語学習者は日本人学生を人的学習リソースとして捉え、自らの学習に役立てたのである。その結果、学習者の情意的な側面に関して、プラスの影響を及ぼすこととなった。つまり、タナサーンセニー（2006）が学習者の情意的な側面に関して、日本人との接触がもたらす影響から、日本人を人的リソースとする日本語学習への有効性を説いたように、K 大学においても、今回の SEND プログラムにおける日本人学生との接触が、日本語学習者の日本に対する興味や、日本語学習に対する意欲、そして自身の日本語能力の認識に対して、プラスの影響を与える結果に結び付いたと考えられる。

次に、日本人学生による授業実習について良かった点として、「やる気が起き、学ぶことへの新鮮さが味わえた」、「教えてもらいながら、交流もできるので授業が一層楽しくなる」などが挙げられた。また、日本人学生の授業は「わかりやすかった」と回答した日本語学習者が 92.9%、「楽

しかった」が 89.3%、「日本語の勉強に役立った」が 94.6%であった。さらに、NT と日本人学生の授業の相違点として、「年齢が近く、親しみやすい教え方が良い」、「伝えたいことが通じ合える」など、好意的な回答が多く見られた。このことから、実習を行うにあたり、日本人学生が指導教員の助言のもと、日本語学習者のニーズに合った授業作りを試みたというだけでなく、日本人学生が日本語学習者と「同世代」であるということもプラスの要因として働いていることが類推される。

一方、改善点として「時々、自信の無さが見られる」、「日本人学生とのコミュニケーションに積極的な学習者とのみ会話をする」という回答が挙げられた。これらは、日本人学生の指導経験不足によるものと考えられる。

続いて、日本語学習者が日本人学生に何を求めているのかを考察する。まず、図2のグラフは、日本語学習者が日本人学生、NT、NNT にそれぞれ何を教えてほしいかという質問についての回答をまとめたものである。その結果によると、日本人学生に教えてほしい科目は Speaking と Culture であり、NT より若干だが数値が上回っている。両科目に共通している点は、現代の生の日本や日本語に触れることができることである。このことから、日本語学習者が会話の教科書にある定型会話文よりも、同世代の日本人と話すことの「楽しさ」や、日本語学習者が興味を持っている漫画やアニメに代表されるサブカルチャーなど、最近の日本文化について NT からの知識とは違った新しい知識の獲得を求めていると思われる。つまり、日本語学習者が日本人学生を日本語学習者自身のニーズに応じてくれる人的リソースとして捉えているといえる。

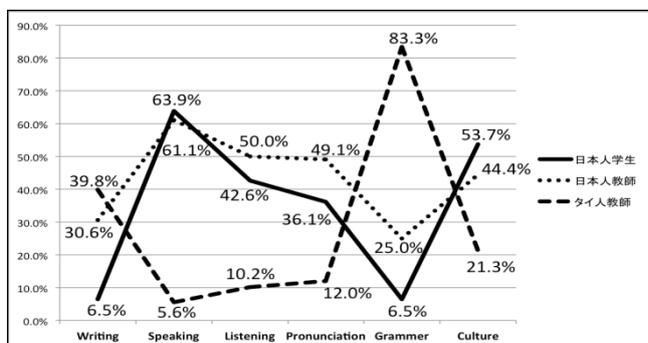


図2 教えてほしい科目

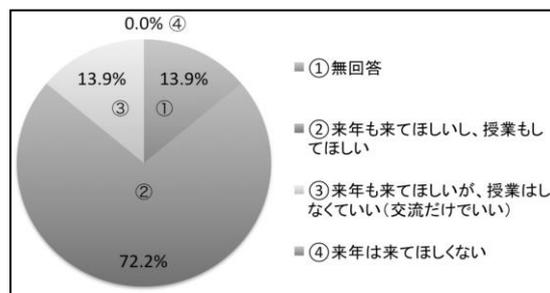


図3 来年のタイでの SEND

プログラムの実施について

さらに、来年のタイでの本プログラムの実施について質問をした結果、図3のとおりになった。これによると、「来年も来てほしいし、授業もしてほしい」と回答した日本語学習者が 72.2% と一番多かった。その理由として、「交流活動だけでは、日本語ができる人ばかりが交流をして自分には機会がない」、「自分の日本語に自信がないから、授業以外で話しかけるのは恥ずかしい」といった回答が挙げられた。これらは、交流活動が一部の日本語学習者に限られてしまう傾向があることを示唆している。一方、授業では、教育実習を通して、日本人学生がクラスの全ての日本語学習者とコミュニケーションを取ることができると考えられる。つまり、一部の日本語学習者は、

自身の内気な性格を考慮し、日本人学生と接触を図るために授業という形態を望んでいると考えられる。

5.2 K 大学への担当教師のアンケート調査から

まず、日本人学生の一連の活動が日本語学習者にもたらした利点について、K 大学の担当教師のアンケート結果を基に考察をする。利点としては、下記の 4 点が挙げられた。

- ①学習者達は自分達の日本語に自信を持つようになった
 - ②教師以外の日本語に触れることで、学習意欲が高められ活発に意見を述べていた
 - ③意見交換をすることで、日本語でさらに発表をしたいという意欲が増し、新出語彙や日本に関連する知識の獲得に向け、モチベーションがさらに上がった
 - ④自分の現在の日本語能力を改めて知ること、今後の学習の目標を認識することに繋がった
- 上記の回答にある①「自信を持つ」や④「自分の現在の日本語能力を改めて知る」というキーワードから、今まで学習し培ってきた日本語が通じることへの自信や、それでもなお不十分な日本語能力の気づきを得たことが窺える。また、②と③の「意欲」や「モチベーション」が「高められた」、「増す」、「上がった」というキーワードから、日本人学生による授業の一部分や交流活動が学習者の心理面にプラスの効果をもたらしたと教師が考えていることがわかる。

次に、実習に臨むにあたり、K 大学の教師は日本人学生に何を求めているのかについて、2 つの質問の回答から考察する。(1) 日本人学生が日本語指導や指導支援、交流活動をするために必要であると考えられることは何かについて、下記の回答が得られた。

1. 「グローバル化」を理解し、海外での日本語教育に興味があること
2. 学習者の年齢、国籍、民族的背景、母語、日本語能力、学習目的等が段階 2 や 3 とは異なる授業での実習を通じて、日本語の指導技術の向上を目指すこと
3. 海外の大学での実際の授業実習を通して、新たな知識と指導技術の獲得を目指すこと
4. K 大学の日本語学習者との交流を通じて、タイの文化的・民族的・社会的背景を理解し異文化理解に努めること

上記の回答から、異文化理解が海外で日本語を教えるうえで必要不可欠な要素である、と K 大学の教師に認識されていることがわかる。そして、あらゆるタイプの学習者を相手にしながら、自分自身の日本語の指導技術を磨いていく努力を怠らないこと、つまり、日本語教育に対して真摯な気持ちで取り組んでいくことを教師は求めているといえる。

(2) K 大学での実習において、日本人学生はどのような位置づけにあることが望ましいと思うかについて、下記の回答が得られた。

1. 授業の一部分を担当するのではなく、TA（宿題の添削などの補助作業を主にする）として参加すること
2. 日本語学習者が日常では行うことが難しい「同世代の日本人との交流」を実践すること

上記の回答から、教師は日本人学生が TA として、そして、学習者の「同世代」の交流相手として、実習に参加することを望んでいることがわかる。それは、段階2及び段階3における実習が、段階4における K 大学での実習を十分想定したものではないと教師が考えたことに起因すると思われる。段階2や段階3において、日本人学生は学習者が10名前後のクラスを想定した場で、構造シラバスに基づいた会話授業の一部を実習として課されている。しかしながら、K 大学ビジネス日本語学科並びに日本語学科において、学習者が10名前後のクラスは存在せず、通常20名から40名の学生が一つのクラスで授業を受けている。また、構造シラバスに基づいた会話授業だけではなく、様々な授業が行われている。段階4における、海外の大学の実際の授業での実習は、段階2や3での学習を実践する場であるのだが、その学習、又はその一部が K 大学の実情に沿ったものではなかったと考えられる。したがって、K 大学の教師は日本人学生に授業においては「その一部を担当する者」よりも、「教師をサポートする者」として、また、授業外においては「日本語学習者の交流相手」としての役割を求めているといえる。

以上の4.1と4.2の考察から、K大学の日本語学習者と担当教師の間で、日本人学生による一連の取り組みが学習者にもたらした利点については意見を共にするが、一方で、日本人学生の授業への関わり方については意見の相違があることがわかった。つまり、この相違を埋めることが日本人学生に求められる役割だと考えられる。

6. まとめと今後の課題

本調査は、C大学による SEND プログラムの役割を考察するために行った。アンケート調査の結果、本プログラムは日本や日本語の学習に対して、日本語学習者のモチベーションを高めるなど、心理面において利点をもたらしたことが判明した。また日本語学習者が日本人学生に教えてほしい科目が、Speaking と Culture であることもわかった。これは、日本語学習者が現代の生の日本や日本語に触れることができる点から、日本人学生が「同世代」であるということの強みを生かして、日本語学習者のニーズに応えられる科目であるからだといえる。

一方、段階4を日本人学生による異文化理解並びに自国の客観的理解を深めることの手段であるとする C 大学と、その段階は日本語教師養成の一環であるとの認識が見られる K 大学との間に相違があることも明らかとなった。K 大学の教師は、タイ人学習者との交流や、準備段階で学習したこと、実際の授業における実践などを通して、異文化理解の促進や日本語指導技術の向上を果たすことを、日本人学生に求めている。しかしながら、それらが、準備段階で C 大学が学生に求めたことと異なったため、K 大学の教師は日本人学生に TA としての授業参加を求めるに留まったと考えられる。

上記の点から、本プログラムは K 大学における模擬授業のあり方に改善点を見出すことができると考える。佐藤・高木(2009)は、授業内で文法項目を指導するのではなく、文化アクティビ

ティのような学習者とコミュニケーションを取りながら進めていくタスクや（課外）授業のほう
が「異文化能力」⁽⁵⁾の獲得に効果があるのではないかと述べている。K 大学には、これを踏まえ、
文化アクティビティーに焦点を当てた模擬授業を提案する。これにより、Speaking と Culture とい
った、日本語学習者が日本人学生に求めている科目を実現できると考える。また、日本人学生に
対しては、日本語学習者と担当教師の考え方の相違を埋める役割を果たさせることも可能である。
そして、C 大学では、段階 3 において、こういった授業形態に対応できる準備をすることが求め
られる。さらに、これらを可能にする、大学間の事前の綿密な協議がなにより重要であると考え
る。本提案及び課題は、準備段階（段階 3）と実践段階（段階 4）の両方において、日本人学生が
異文化理解並びに自国の客観的理解を深めることに寄与すると考える。

筆者らは、日本語教育の分野において、日本と ASEAN との架け橋となるエキスパート人材の
育成に向け、授業及び学習環境づくりについて、さらに実践を重ねていきたいと考えている。

注

- (1) http://globalization.chuo-u.ac.jp/resources_chances/abroad/global_program/send/ 参照
- (2) http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/24/09/attach/1326084.htm 参照
- (3) 『やさしい日本語のしくみ』(2003)と『はじめての人の日本語文法』(1991)である。
- (4) <http://www.japanfesta.com/2014/> 参照
- (5) 佐藤・高木（2009）は異文化と関わっていく能力を「異文化能力」と定義した。

参考文献

- 庵功雄・他（2003）『やさしい日本語のしくみ』、くろしお出版
- 小川貴士（1991）「読みのストラテジー、プロセスと上級の読解指導」『日本語教育』第 75 号、
pp.78-86
- 小柳昇（2002）『ニューアプローチ中上級日本語（完成編）』、語文研究社
- 佐藤綾・高木裕子（2009）「日本語教育実習における「異文化間能力」獲得に向けて」『WEB版
日本語教育実践研究フォーラム報告』
- タナサンセーニー美香（2006）「日本人との接触が日本語学習者に及ぼす影響に関する一考察」
『日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究 海外調査報告書』、国立国語研究所
- 野田尚史（1991）『はじめての人の日本語文法』、くろしお出版
- 宮内俊慈（2009）「パワーポイントによる日本語教育の実際」『関西外国語大学留学生別科日本語
教育論集』第 19 号、関西外国語大学、pp.127-142
- AJALT（2006）『JAPANESE FOR BUSY PEOPLE II[Revised 3rd Edition] I Kana Version』、AJALT
- AJALT（2011）『JAPANESE FOR BUSY PEOPLE II[Revised 3rd Edition] II』、AJALT